

一 般 演 題 抄 錄

10. 生体顕微鏡によって観察できる 糖尿病患者の舌茸状乳頭の変化について

川口肇子 村田清高

近畿大学医学部耳鼻咽喉科学教室

木村雅友 橋本重夫

近畿大学医学部第2病理学教室

目 的

糖尿病患者には味覚異常や舌乳頭の萎縮をきたす例があるが、その背景に細小血管症の関与する可能性があると考えられている。そこで生体顕微鏡を用いて舌茸状乳頭の形態や終末血管像を観察することにより、糖尿病の種々の変化に伴う神経障害や血管障害を推定する情報が得られる可能性がある。このような意味から舌茸状乳頭の観察を行ないその意義を検討した。

方 法

健常者および糖尿病患者に対して、First社製外来診察用顕微鏡に高倍率撮影用レンズに改良したカメラを設置して舌尖部茸状乳頭を観察し、その形態や大きさ、乳頭内終末血管像の変化について型分類を行った。この結果を用いて健常者については20歳代から80歳代までの53例でその年齢による変化を検索した。次に年齢的な変動の因子を除外するために症例数の多い50歳代、60歳代の糖尿病患者33例において、同年代の健常者21例と比較するとともに、糖尿病の諸因子の一つである合併症との関連性について検討した。

結 果

1. 健常者における茸状乳頭の年齢による変化：
①乳頭の形態は若年者で卵円形に緊張して粘膜表面に肥厚のない型が多くみられたが、この型は加齢に

ともない減少していた。これに反して粘膜表面が肥厚し扁平、萎縮を示す型の割合が加齢と共に増加していた。②乳頭内の終末血管像は若年者ではきれいな樹枝状、ループ状をなし血管の走行が明らかな型が多く見られた。血管が不明瞭で点状、顆粒状、塊状に見える型や、ほとんど血管が消失してしまった型が、加齢によって増加していた。③乳頭の大きさの変化は若年者では大型が多く加齢とともに大型は減少し、逆に小型は加齢にともない増加傾向にあった。

2. 糖尿病患者における同年代の健常者との比較：茸状乳頭の表面の肥厚、扁平化、萎縮、乳頭内終末血管の走行の不明瞭化と点状、塊状変化があった。また乳頭の大きさも小型で血管瘤や血管の一部が拡張するという特徴的な所見が得られた。

3. 四肢のしびれ、疼痛、冷感、知覚異常といった末梢神経症状を示唆する自覚症状を有する者は有さない者に比べ、また糖尿病性網膜症および糖尿病性腎症の悪化と平行するように茸状乳頭の2のような変化の進行が見られた。

考 察

1. 茸状乳頭の形態、終末血管像および大きさには age dependency が認められるので、その評価に際しては年齢的配慮が必要であると考えられた。2. 生体顕微鏡による茸状乳頭の観察は、糖尿病性神経障害や血管障害を推定する簡便かつ有用な検査法となる可能性が示唆された。